

【学術研究論文】

# 臨床福祉学への序説

－ Clinical Social Work のアイデンティティ －

太田 義弘

---

Introduction to Clinical Social Work : The Identity of Clinical Social Work

Yoshihiro Ohta



2010年3月

総合福祉科学研究

Journal of Comprehensive Welfare Sciences

【学術研究論文】

# 臨床福祉学への序説 – Clinical Social Work のアイデンティティ –

**太田 義弘\***

Introduction to Clinical Social Work : The Identity of Clinical Social Work

Yoshihiro Ohta

## 要 旨

本論文は、わが国における臨床福祉学のアイデンティティの確立を目指したもので、その序説を構成するものである。

未確立の臨床福祉学の概念を考察するために、まず社会福祉の諸概念を整理し、続いてソーシャルワーク概念の特徴を考察し、さらに、北米における clinical social work の動向を紹介している。これらの検討から、ジェネラル・ソーシャルワークの特性を紹介し、その視野や発想を基本にして臨床福祉学のアイデンティティについて論述したものである。

内容は、以下のように構成されている。

- I はじめに
- II 命題をめぐる前提と目的
- III 社会福祉概念の実体と再編
- IV ソーシャルワークとしての再編と立脚点
- V 臨床福祉学としてのアイデンティティ
- VI おわりに

## Abstract

This article aims at establishing the identity toward clinical social work and consists of an introduction to the theory and practice of clinical social work. In order to reconsider the concept of yet established clinical social work in Japan, first of all some concepts related to social welfare are classified and analyzed, and then it should be deepened to consider the characteristics of social work concept after having introduced the trend of clinical social work in the United States. Through these studies, furthermore the characteristics of General Social Work are introduced in sequence and finally the identity of clinical social work is examined in detail on the basis of the perspectives in Japan.

The contents are constituted as follows.

- I Introduction
- II The premise and the purpose involving a proposition
- III The entity of social welfare concepts and reconstruction

\* 関西福祉科学大学 社会福祉学部 教授

- IV The reconstruction and a standpoint as social work
- V Identity as clinical social work
- VI Conclusion

● ● ○ **Key words** 臨床福祉学 clinical social work / ジェネラル・ソーシャルワーク General social work / 統合的視座 integrated perspectives / 生活世界 life cosmos / 学際的視座 multi-disciplinary perspectives / 支援科学 the life-enhancing science

## I はじめに

今日の複雑化した社会的状況や対応する科学技術の学際化の動向は、自らの立脚する専門領域が単一科学のみで推進することの限界を示している。人間の行動や社会生活さらに社会問題は、特有な因果関係をもつシステム状況として理解する必要があり、われわれの生活は、一人ひとりがバランスと秩序をもった小宇宙という独特な世界に生きる存在として、固有な生活世界 cosmos からとらえられるようになってきている。このような認識なくして人間の福祉を考えることはできない。また、このような視野や発想には、学際的な協働が必要で、これらによってはじめて人間生活へのチャレンジに固有な展望が見えてくるといえよう。分立して発展・深化してきた科学技術は、今まさに学際的な再編を迫られている。

ところが、専門領域の深化によって科学技術が進歩すればするほど、人間の生きざまを近代科学の分析的手法で分解して析出し、その生活コスモスに生きる固有な特質を捨象したまま、単一科学で対象を把握し、解決を模索する没価値志向に埋没してきている。諸科学の発展は、科学や科学者のための研究や学問ではなく、人間の真実な存在に迫るものでなければならず、そのために諸科学の学際的協働を不可避にしてきている。

われわれの大学が標榜する「福祉科学」とは、大学の理念と建学の精神を根底に学際的視野と発想に支えられ、固有な価値観や専門知識と科学技術さらに具体的施策とを具備した科学としての実践活動体系を構成したものである。それは個人や家族、近隣、環境と社会などから、人間の健康な社会生活を包括・統合した実践科学、さらに人びとと環境との適合を支える支援科学といえることができる。

福祉科学は、用語として学会などで市民権をえ、共

通理解される域には達していない。今後に究明されねばならない課題を担った用語である。まして、われわれが学内学会の名称として掲げた「総合福祉科学」も、学部での教育課程からなる社会福祉・臨床心理・健康科学・福祉栄養の各学科の単なる連合組織や寄り合い所帯、関連学術研究の総称程度の理解が現実のところであろう。そのために固有な研究から専門性や科学性、研究対象への実存性あるいは研究方法の学際性への基盤を確立し、そこに立脚した教育や研究さらに実践を通じて、総合福祉科学という実体の独自性を明示していかねばならない。もちろん、それは歳月をかけて構築していかなければならない今後の一大命題である。

そこで本小論では、その命題に一石を投じるため、まず福祉科学という教育機関の名称がもつ意味を、社会福祉学部として最初に誕生した立場より、つまり歴史的な社会福祉学の視野や発想から考察してみたい。それは福祉科学の命題を、学際化して正面から考察するのではなく、ひとまず伝統的な社会福祉学の系譜から追究してみたい。その意図は、学際的展開への構図を模索するとともに、何よりも諸科学がボーダレス化する中で社会福祉学の固有性を臨床福祉学として確立することにある。換言すれば、社会福祉学を基幹科学として福祉科学の展開を構想してみようということである。

## II 命題をめぐる前提と目的

### 1 社会福祉をめぐる立場

社会福祉学を基点にして福祉科学の構図を考察する場合に、立脚する社会福祉という概念をめぐる問題を少し整理しておかねばならない。それは社会福祉という用語があまりにも不用意に用いられ、勝手な解釈の

もとに独り歩きをしているからである。筆者は、福祉・社会福祉・社会福祉学・社会福祉実践・社会福祉援助技術・ソーシャルワークなどの用語を概念として峻別して用いている。

福祉とは、もともと専門用語ではなく、いわゆる市井で語られる人のしあわせであり、一般には広く人びとの幸福を意味している。それに対して社会福祉は、公共の福祉をいうわけで、時代を反映した共通の価値や理念、推進する計画や施策と理解され、広く社会的水準に照らし生活を維持する施策の総称と考えられている。社会福祉学は、社会福祉研究についての総称であるが、わが国では、社会福祉を政策科学あるいは社会科学と位置づけた制度・政策論研究が主流を占めてきた。他方では、実践科学あるいは人間科学として利用者支援に焦点を置いた方法・技術論研究とに2大別できるが、後者は施策に従属する派生的課題だと批判的にとらえられてきた長い論争の歴史がある。

社会的背景が進展した今日では、その比重は次第に実践研究へと移行してきているが、社会福祉学研究には、このような2大潮流がある。次の社会福祉実践とは、社会福祉をサービスとして提供すること、社会福祉計画に基づく運営と実務の推進ということになるが、その実施にあたり、実務の公正で円滑な供給方法からなる社会福祉行政活動と考えるか、利用者側の課題解決活動に重点を置く実践活動と考えるかで姿勢や方法が異なる。社会福祉実践は、広義には、これら両者を含みさらにボランティアや社会福祉サービスに関連する隣接科学の専門家の活動をも包括したものと理解されている。また狭義には、後者の利用者への相談援助活動に特化した専門的な課題解決方法と理解されている。

次に社会福祉援助技術とは、狭義の利用者支援を目指した概念の別称といえるが、ここにも本来の意図とは矛盾した現実がある。施策供給という行政活動の便宜的な方法や手段と歪曲化され、利用者の状況に対応した姑息な対処手法として、施策の不備への走狗を担わされ、専門性や科学性とはかけ離れた活動と理解され機能している問題である。

社会福祉士という国家資格制度が制定されて20年あまりが経過するものの、実践現場における社会福祉士の業務に対する理解や専門性への認識が依然として不透明であるのは、そのような事由からである。そし

て介護や社会福祉サービス提供への便利屋としての期待や役割を担わされている。社会福祉援助技術として講義や演習さらに実習にと膨大な時間をかけ専門的な社会福祉教育をするものの、現実には専門性や科学性を標榜できる固有で不可欠な業務や役割が浸透してきているわけでもない。

## 2 考察の目的

このような混乱した現実を払拭するためにも、社会福祉学の諸概念の中で最重要概念であり、理念や目標としての社会福祉を、利用者の生活の中に実現する専門的・科学的実践活動としてのソーシャルワークを強調しなければならない。それは高度専門職としての固有な視野や発想と技術や方法からなる実践活動を意味している。先ほど指摘した用語の混乱は、社会福祉に対する利用者の期待や実感であったり、政治家の主張する目標や理念、行政が考える社会福祉サービスであったり、また教育研究者が考察する制度や施策、あるいは従事者による実践概念など立場の相違から生じてきているものである。

社会福祉の基礎構造改革以来、かつての社会福祉を見直し、国家や社会による保護や援助施策として提供者側の課題を中心にした「与える社会福祉」から、次第に社会福祉サービスを利用者側の課題として受け止め理解する「利用者中心の視点」へと理念や視点が移行し、社会福祉という施策や制度の整備を前提に、利用者の立場や生活コスモスを重視し、利用者を中心に「自己実現を支援」する活動へと発想が定着してきている。

それは社会福祉の理念や目的を制度や政策に具体化したハード福祉の整備を前提に、ねらいを人びとの生活の中に実現する支援活動としてのソフト福祉へと焦点が移行してきたということである。社会福祉という曖昧な概念が、人びとの生活を支援する固有な支援科学としてソーシャルワークを中心にした概念でとらえなおされる動向が顕著になってきたということである。これについては後ほど解説を加えてみたい。

改めて社会福祉の究極目標は、利用者の自己実現への支援にある。これからの社会福祉には、ハード福祉を前提や条件にした実践的課題が中心になりつつある。社会福祉の専門性や科学性は、制度や政策にある

のではなく、利用者の支援方法にあり、施策に期待し託された成果を、実践によって生活の中に実効として具体化するところに意義がある。研究者にとって、その研究に専門性があることはいうまでもないが、究極目標は利用者の課題解決で、その成果は、利用者とソーシャルワーカーとが参加し協働する支援過程を通じて実現する。そこに専門性や科学性さらに固有性が存在することになる。

また、実践の専門性や科学性の課題は、ソーシャルワーカーの固有な業務を主張するためにあるのではなく、利用者の自己実現への支援を通じて評価される課題である。しかし、その現実には日常的な馴れや勤と経験に頼っていることも否定できない。理論と実践とを系統的に統合化し、方法を専門化・科学化しようとチャレンジしているのが、ソーシャルワークとしての臨床福祉学である。これらの特性や実践方法については後ほど詳述してみたい。

社会福祉が恣意的で曖昧に位置づけられることから、実践や教育と研究の現場では、混乱した状況が潜在化してきている。そこで本論考は、それらを整理することから、ソーシャルワークとしての臨床福祉学のアイデンティティを整理して、まとめてみたい。そのための本考察の目的を、以下のように提示しておく。

- (1) 社会福祉をめぐる諸概念の整理
- (2) 概念整理への視野と発想
- (3) 概念理解の再構成とシステムの統合化
- (4) ジェネラル・ソーシャルワークとしての臨床福祉学  
のアイデンティティ

これらの課題へと順次考察を深めながら、福祉科学と総称されている実体について、ソーシャルワークとしての側面から臨床福祉学の特性を整理し、そのアイデンティティを追究してみたい。

### 3 ソーシャルワークの概念動向をめぐる問題

用語としてのソーシャルワークは、アメリカなどを中心にして100年余りの歴史をもち、高度専門職としてソーシャルワーカーの固有な活動によって社会的声価が浸透してきており、広く利用者の生活支援に不可欠な役割を果たしてきている。その背景には、欧米での大学院教育と研究さらに臨床実践現場と協働した活動

実績があつてのことである。その成果は、わが国の臨床実践活動や教育・研究にもリアルタイムで反映され、多大な影響力を与えてきている。そのソーシャルワークの原点を再認識しながら、わが国での命題の追究を深めてみたい。

ところで近年の国際化時代の進展とともに南北格差や文化の多様性などの動向から、ソーシャルワーク実践をめぐる国際的な動向も揺れている。かつてはソーシャルワークの視野や発想に対して、方法の固有性、科学性や専門性などについては、一定の共通理解が確立していたが、このところ次第に国際的な動向を反映して人権問題から社会問題まで、各国の国状で貧困や労働、経済格差さらに国民性や生活文化などへと課題が広がり、国際的にも社会開発への推進機能がソーシャルワークの一大特性であると強調されるようになってきた。

確かにソーシャルワークが示してきた国際的な社会問題に対する意識変革と行動力の高揚や推進が強調されねばならない時代ではあるが、しかし、ソーシャルワーク概念の原点は普遍であり、それを具体化する方法が、多様化してきているといわねばならない。

国際ソーシャルワーカー連盟 The International Federation of Social Workers (IFSW) の提示したソーシャルワークの定義<sup>(1)</sup>によると、国際的にも、ソーシャルワーク概念が拡散化してきており得体の知れない実体概念へと抽象化してきている動向がある。この定義は、万国に通用する国際定義として共通理解できる概念をまとめたものである。定義とはいうものの、ソーシャルワークの目指す目標や原理、方法についての概略を指摘したもので、ソーシャルワークがチャレンジする今日的な社会問題に対応する特徴の解説であり、正確にはソーシャルワーク概念解説というべきものである。ただし、文末に「21世紀のソーシャルワークは、動的で発展的であり、したがって、どのような定義によっても、余すことなくすべてを言いつくすことはできない」と断っている<sup>(2)</sup>。

これが国際的な動向とはいえ、ソーシャルワークの共通基盤と職業資格制度さらに社会的声価の定着している先進的福祉国家では、このソーシャルワーク概念を社会的現象へのチャレンジとして積極的に受け止めるであろうが、わが国のようにソーシャルワークの固有な基盤が曖昧で、高度専門職としても未定着などこ

ろでは深刻である。玉石混交の社会福祉従事者業務という混乱状況下で、この概念は、意識や役割、領域や活動などの複合するマージナルな特性を強調することから、ますます混迷の度を深めることになってきている。このような視野や発想をもった医師や看護師、弁護士や臨床心理士など隣接領域の専門家たちが、その活動の裾野を拡大すれば、ソーシャルワーカーが果たす固有な存在感は、まったく霞んだものになることだろう。

### Ⅲ 社会福祉概念の実体と再編

#### 1 社会福祉概念の錯綜

そこで恣意的に理解され混沌とした社会福祉概念を整理し、ソーシャルワークの立脚点と共通基盤を明確にしたいのだが、その意図は、社会福祉を実践活動としてのソーシャルワークからとらえ直すことにある。そのために社会福祉とソーシャルワークとの関係や概念としての相違を明確にしておかなければならない。

これらについては、既に幾度となく概念整理をしてきたところであるが、詳細な特質の比較考察などは、文献を参照いただきたい<sup>(3)</sup>。簡潔に整理すれば、社会福祉とは、日本国憲法第25条に明言されている権利としての社会福祉、つまり人間の幸せな社会生活を保障する施策である。その意図は、利用者の生活状況に応じて多様な社会福祉サービスを提供するためにはあるが、具体的な展開や方法自体を指すのではなく、そのための指針や計画などの整備されたアイデアであり、制度や政策を意味している。これに対してソーシャルワークは、その社会福祉の目的や意図を実践によって利用者の生活の中に具体化し実現する専門的な支援活動であると峻別できる。これらを無定見に混同することから混乱が生じてきているわけである。

峻別の意図は、分立概念として対峙させ論争し、立論の妥当性を取捨選択することに目的があるのではなく、それらの特質を理解したうえでシステム論的統合化によって共通理解を確かなものにするためである。具体的には、人間の生活という側面から、社会福祉を包括・統合的にとらえ直すことである。それはわれわれ自身が、固有な成り立ちとバランスや秩序をもった独特な世界からなるコスモスで社会生活を営んで

いるからである。それは喜びや悲しみ、あるいは楽しみや怒りに遭遇しながら自らの生きる意味や幸せ、他方で、厳しさや苦悩を実感して生きている現実からとらえることである。また、一人の人間にとっては、具体的な出来事と経験の蓄積からなる現実世界ではあるが、他者からはとらえどころのない異次元と異空間からなる抽象化された世界に生きているわけである。社会福祉は、このようなあるがままの生活コスモスに生きる人間の支援に応えていかねばならないからである。

そこでわれわれが日頃活動している生態的世界を、生活コスモスとしてとらえねばならないが、これは至難のことである。そのために生活という実体を、構造や機能と時系列の変容過程から分析して、ひとまず特徴を可能な限り具体化して把握し、それらの分析結果を利用者と一緒に確かめながら、生きざまとして多角的かつ生態的にとらえようとする思考方法がシステム概念である。この視野や発想を用いて人間の固有な社会生活の支援に迫ろうとしているのがソーシャルワークである。この方法は、重要な意味をもって存在しながら混乱している社会福祉概念を整理することにも役立つからである。

#### 2 社会福祉論争の收拾

社会福祉概念の混乱は、戦後まもなく社会福祉に対する社会科学的見地からの批判に始まった。それ以来論争を通じ、社会福祉は、伝統的に政策科学と位置づけられ社会科学的な発想を主流にして論じられてきた。改めて考えてみると、社会福祉を必要とする現実について、その因果関係や方法としての対応策を真剣に論争してきたわけである。それは時代や人を変えて延々と継承されてきた。その後の時代の変遷とともに思想や文化の進展、社会や経済の発展と科学や技術の発達によって国民生活は急速に変質し、社会福祉の制度や政策と方法や技術は、かつての論争の残影を秘めたまま今日の社会福祉の実践現場や教育と研究の背景に、一定の共通理解を得て位置づけられるようになってきた。

そして、それは戦後約50年を経た社会福祉の基礎構造改革の進展によって、新しい社会福祉の時代へと変遷を遂げてきた。この経緯や現実を今は亡きかつて

の論者は、存命ならどのように総括することができたであろうか。利用者のためにと称しながら主義主張と理論や仮説のもとに熾烈な論争を積み重ねてきた歴史を、どのように評価したであろうか。確かに学術研究の成果として時代を反映した論争の評価はできると考えられるが、一方では、利用者を置き去りにした火事場を取りまく野次馬のような不毛な論争も、われわれのなかに印象深く刻まれており、醒めた目で批判的に見ていた多くの研究者や知識人がいたことも確かである。それらの長年の残滓が、改革への引き金になったことも疑う余地がない。それらの経緯は新しい時代の社会福祉の動向を通じて、厳しく問い直されることであろう。

このような論争の混乱した経緯を收拾するために、かねてからジェネラル・ソーシャルワークという包括・統合的概念を主張してきたところである。それは、分立してきた社会福祉概念に対する理解を再編しようというもので、かつての論争経過を、①特性未分化理解のまま放置することなく、システム理論を駆使しながら、②特性分立理解へと分析を進め、そして両特性の意味と固有性を掌握したうえで、③包括・統合理解へと進展させることをねらったものである。これは、システムの統合化のために理論と実践、人と環境、施策と方法などを弁証法的に昇華する構想を意図している。これらの詳細な方法と過程については、さらに先行文献を参照願いたい<sup>(4)</sup>。結論的には、ソーシャルワーク実践から制度や政策としての社会福祉をとらえ直すというところにある。その理由は、広く社会福祉の真価や究極目標が、利用者の立場で自己実現や課題解決を手中に収め実現することにあり、そして制度や政策の整備・改善過程をも含む利用者の生活コスモスへの支援活動がソーシャルワークであるからである。

### 3 社会福祉概念理解の諸相

これらの歴史をふまえつつ、社会福祉概念に対する多様な理解を、次の5類型に整理することが可能である。表Ⅲ-1のように、①目的概念、②施策概念、③実体概念、④構造概念、⑤実践概念とに分類できる。

比較範疇 概念類型	立脚点	目標	対象	内容
目的概念	国家・社会	生活の安定維持・向上	国民一般	理念・目標設定・確立
施策概念	施策策定整備・制定	理念・目標制度化	該当者	計画・検討立案・策定
実体概念	一般庶民	現状改善期待・展望	当事者	理解と実感
構造概念	実務担当者	サービス需要・供給	対象者	サービス提供実務・行政
実践概念	ソーシャルワーカー	課題解決自己実現	利用者	自律・支援参加・協働

表Ⅲ-1 社会福祉概念の諸相と特性

第1の目的概念とは、社会福祉の理想や目標を公共の視点からとらえるもので、健康で文化的な生活の保障や国民福祉の増進を意味する考え方である。第2の施策概念とは、社会福祉の考え方を具体化した法律や条令などからなる制度や政策と考える立場、第3は、実体概念と分類できるもので、広く利用者の立場で実感する社会福祉の姿を、さまざまな庶民感覚でとらえた現実を指す考え方である。第4は、構造概念で、社会福祉の内容を仕組みとして体系的に整理した考え方である。そして、第5が、実践概念で、社会福祉サービスの提供を利用者とのかわり方で説明した概念である。

これらの社会福祉という身近にありながら多様に理解されている考え方を、わかりやすく立脚点や目標・対象・内容などのカテゴリーに分解して整理してみると、社会福祉という概念の複雑な実体が幾分か理解できると思う。それぞれが立場や視点を変えて社会福祉をとらえているわけで、その多様性を比較するために切り口を変えて解説したものである。

目的概念は、社会福祉を国家社会という大所高所からあるべき姿として表明したもので、その時代の国民生活の目標を国政の立場から、国民一般を対象にして理念や目標を明示した内容から構成し、施策概念は、国政や地方行政関係者あるいは制度・政策研究者による施策整備という観点から、施策の制度化を目標に、問題状況に直面している該当者を対象に想定し、具体的な計画の立案や施策の策定を内容としている概念である。

実体概念とは、一般庶民の発想や感覚からなる概念で、当面の生活状況改善への期待を目標に、当事者としての社会福祉に対する理解や実感を表した考え方

ある。構造概念は、社会福祉の実務を担う立場からの発想で、適正な社会福祉サービスの需要と供給を目標に、基準に該当する対象者に、適切で公正かつ迅速な社会福祉サービスを提供する実務と社会福祉行政の円滑な推進活動を意味するとらえ方である。

そして、実践概念は、従事者の立場から、ソーシャルワーク実践としての専門性を意味する場合と、ボランティアをも含んだ実践従事者の立場から広くとらえる場合があるが、主として前者を中心にしたとらえ方での理解である。ソーシャルワーカーの立脚点から、課題解決と自己実現を目標に、利用者中心の対象認識のもとに、利用者と支援者との参加と協働を通じて支援過程の展開から成果を引き出す専門的な活動概念である。

これらの5類型化される概念の他に、さらに社会福祉の特性を細分類したもの、目標や内容などを部分的に統合して類型化したもの、あるいは切り口やカテゴリーを変えた概念分類もある。例えば、支援者側の技術や技法・利用者側の変容・サービス供給の方法・サービス内容・実践過程・支援関係展開に焦点をおいたものなど、まことに多様な特徴を指摘した社会福祉概念を類型化する動向などがある。

#### Ⅳ ソーシャルワークとしての再編と立脚点

##### 1 社会福祉概念のシステム理解と再編

このように社会福祉の多様性を単に並記するだけでは、錯綜した問題状況に対する混迷を深めるだけである。そこで、これらのとらえ直しから、社会福祉概念の実践的再編を志向しなければならない。それは今後の一大課題であるが、視野や発想を転換して支援科学という立場から、社会福祉概念の統合的再編を検討することに大きな意味がある。これらについても、既に、その概要をジェネラル・ソーシャルワークとして主張してきたところであるが<sup>(5)</sup>、臨床福祉学の固有性を論証するためにも、これらの再編を前提や課題として指摘しておかねばならない。

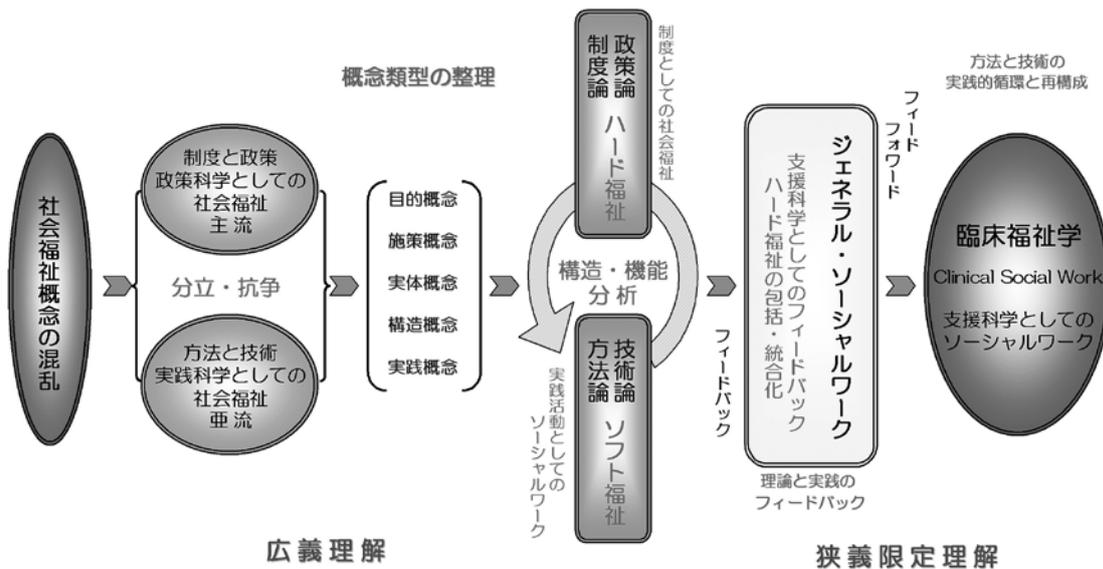
それは、ソーシャルワーク実践という専門性や科学性さらに実存性に支えられた固有な視野から、多様化した社会福祉概念をとらえ直すということになる。そのためにも、再編への考察枠組みをシステム論的統合

化に求めたい。それは多様性を秘めた社会福祉概念について、構造・機能という視点から特性を分類・析出することから始まる。そして、改めて分類した視点から、もう一方との関係や役割を考えることである。それはかつての分立・抗争してきた二潮流を見すえながら、制度論・政策論としての社会福祉を、基礎構造として根幹にすえ、その上に立脚した方法論・技術論が実践活動として機能するソーシャルワークであると位置づけることが至当である。これに対して今日では異論がないと考えられるが、問題は、それらの関係をめぐってである。

誤解があってはならないが、これらのシステムとしての構造と機能は、相補的概念で一方を前提や条件にして成り立つ概念である。思考方法として便宜的に二特性に分類するものの、社会福祉というダイナミックな実体を理解するためには、本来システム論的に統合化された視野や発想で把握されねばならない。したがって、制度としての社会福祉は、構造論的視点から制度や政策の供給や充足を機能として期待する観点だということである。また、実践活動としてのソーシャルワークは、その前提に制度や政策という基礎構造を根幹に、能動的に機能する専門の実践活動を意味することになる。両者は、主従関係あるいは本質・派生という軽重を意味する関係ではなく、システムとして統合化された表裏一体をなす相補的概念である。

この場合、錯覚してはならないが、広く社会福祉と理解されている概念の最先端は、つねに利用者の現実生活にあることを忘れてはならない。制度や政策もつねに整備・改善されねばならないが、そのこと自体が最終目的ではなく、システムとして循環する相補関係にある。特に実践場面で出会う利用者との関係から、実践活動の展開を通じ利用者の目で制度や政策からなる社会福祉サービスを活用し、問い直しフィードバックすることを忘れてはならない。そこに専門性や科学性また実存性が問われることになるからである。

これは制度・政策に対して方法・実践の優位性を主張することではなく、包括・統合化された表裏一体をなす社会福祉概念のシステム理解ということから、ソーシャルワーク実践の場が利用者に出会うインターフェイスであり、喫緊の課題を内包した場面であることである。



混乱・分立・乖離・抗争 → 概念の整理 → 再編への視座 → 包括・統合化 → 実践概念の定立

図IV-1 ソーシャルワークとしての臨床福祉学の位置づけ

## 2 社会福祉概念のシステム論的統合化

この分析視角は、図IV-1にまとめられる流れのごとく論争の歴史と伝統を反映して、ハード福祉とソフト福祉とに置き換えることができる。それは本質論争という主従の覇権を主張することではなく、システム関係からなる不可欠な要素と位置づける思考方法の統合化によって、役割を相互に意義づけることになる。ハードとソフトとは、まさに不可分の実体を抽象化して解析する考え方で、固有の基礎構造が微妙な能動的機能を生みだし、その機能の継続と蓄積過程が、一定の均衡状態を能動的に維持するために、さらに構造を変革していくというシステム思考からなる相補関係を意味している。

極論するとハード福祉とは、制度としての社会福祉、つまり理想や目標を具体化した社会福祉の仕組みをいうわけである。仕組みは、前提や条件をなす基礎構造であって、それ自体が能動的に機能するわけではない。効果や役割を期待した能動的機能を創出する仕組みという理解である。コンピュータに置き換えれば、ハードとは、機器本体をいうわけで、ハードが状況を判断してあらゆる事態に対応してくれるわけではない。その高度な情報処理機能を活用するのは人間の役割で、コンピュータを目的に沿って活用するところに機能の重要性が秘められており、また、そこにコンピュータ活用への専門性が存在することになる。

したがって、ソフト福祉をインターフェイスにして、そこからの出発に専門性が存在することを錯覚してはならないし、さらに、そのフィードバックがハード福祉を再構成することになるからである。社会福祉概念のシステム的統合的理解は、このような循環する統合的発想を意味している。マルクスの「存在が意識を規定する」という主従関係からの諦観ではなく、ソフト福祉からの始動によって制度としての社会福祉、つまり理念や目標が利用者の生活の中に実現し、そこでの利用者の現実から制度としての社会福祉の整備への視野や発想を内包した活動が、ソフト福祉としてのソーシャルワーク実践に他ならない。

対峙してきた背景をもつ二大潮流を分析して整理するだけでは意味がない。それらの統合化のためにシステム概念を用いて構造と機能とに分化し、前者を制度としての社会福祉に、後者を実践活動としてのソーシャルワークに置き換えることができるとシステム分析を主張してきたところであるが、この分析内容の紹介については、前出の文献で詳細な特性考察を加えてあるので、そちらを参照願いたい<sup>(6)</sup>。

そこで次に、システム論的統合化への視野や発想から方法についての考察を進めてみたい。その発想の基点は、ソフト福祉からハード福祉を包括・統合化しようとするところである。先に指摘したごとく、コンピュータの高度の情報処理能力は、ハードとしての条件ではあるが、それが目的を策定し作業を計画し結果を判断

するわけではない。重要なことは、それをどのように使いこなすかということに意味があり、そこに専門性があるからである。ハード福祉は、つねに前提条件にはなるが、人間の課題解決には必ず人手を介した社会福祉サービスが不可欠であり、何よりもそこでのソフト福祉、つまりソーシャルワークの展開が鍵を握っている。また、その専門的な支援活動が、人の課題解決能力を高め環境のもつ支援力を高め、目標を効果的に達成することになるからである。

### 3 ジェネラル・ソーシャルワークとしての立脚点

先に図示してきたように多様性を秘めた未分化の社会福祉概念を、分析整理してソーシャルワーク実践というソフト福祉活動を基点にして、利用者への課題解決を当面の目標にすると同時に、他方では、その結果や成果からソーシャルワーク実践の課題を制度としての社会福祉へフィードバックすることの重要性を指摘してきた。ソーシャルワーク実践という視野や発想に基づく専門的な生活支援過程の展開活動を中心にして、制度や政策の整備や改善にかかわっていかねばならない。つまり実践活動としてのソーシャルワークから、制度としての社会福祉を包み込み、包括・統合化しようとすることを意味している。

その視野と発想、理論と実践、方法と技術が、かねてから主張してきたジェネラル・ソーシャルワークである。社会福祉の究極目標は、制度や政策の整備された福祉国家の確立にあるのではなく、それを前提に、あるいは再構成を通じて利用者の生活コスモスに寄りそった自己実現を成就することにある。同時に、そのことは実践活動としてのソーシャルワークという立場から、利用者支援を基点にして施策の活用や整備をとらえ直すことを意味している。

この構想は、高度専門職としてのソーシャルワークを意図したもので、それらに対応した教育・資格・学識・技術・臨床経験などが求められることはいうまでもない。また、利用者支援への実践活動とともに、施設機関の運営や社会福祉サービスの改善や維持向上へのフィードバックや、さらに職能団体や研究活動への参加や協働などが不可欠であることはいうまでもない。このような高度専門職のイメージを前提にして、多様化した社会福祉概念のシステム論的統合化が、ジェネ

ラル・ソーシャルワークという視野や発想からなる構想である。

その特徴を列挙しておく、

- (1) 人と環境からなる生活コスモスへの固有な視座
- (2) 理論と実践との架け橋となる中範囲概念の展開
- (3) 課題解決に焦点化した包括・統合的実践介入
- (4) ソフト福祉によるハード福祉の包括・統合化へのシステム循環
- (5) 支援科学としての学際的協働
- (6) 利用者と支援者の参加と協働による科学的・実存的展開

などにまとめられるが、これらについての解説は、それぞれ先行研究として文献にまとめてあるので参照願いたい<sup>(7)</sup>。

ジェネラル・ソーシャルワークは、第1に、利用者を中心にした固有な視点として、生活コスモスに視座を置いたアプローチをすること、第2に、理論と実践との架け橋に支援ツールを介在させた実存的・科学的方法として中範囲概念を展開していること、第3は、独自の生成過程から分立して発展してきた実践レパトリーを、利用者の実体（エコシステム状況）に適用できるよう焦点化し、包括・統合的に推進すること、第4が、施策と方法との複眼的視座から支援過程のフィードバックによって施策の再編と実践の再構成を志向すること、第5が、生活コスモスの再生には、支援科学としてのソーシャルワークを要に、隣接科学の学際的協働が不可欠であること、そして第6に、指摘してきた特徴を生かした利用者との参加と協働からなる支援過程を科学的・実存的に推進することである。

これらの考察の流れから、臨床福祉学の立脚点をジェネラル・ソーシャルワークに置いて、その構成や特性を構想してみたい。

## V 臨床福祉学としてのアイデンティティ

### 1 clinical social work の生成経緯

1991年に大学改革の推進ということで、当時の文部省が高等教育の個性化、教育研究の高度化、組織運営の活性化を目指して大学設置基準を改正した。バブル経済を背景に大学の設置拡大が急増し、多様な学部や学科が誕生してきた。社会福祉学領域でも新名称を

冠した学部や学科が、設置の趣旨に教育課程の固有性を標榜して出現してきている。その中に臨床福祉学や福祉臨床学などの名称が登場してきている。個性化した特色ある社会福祉教育をうたっているものの、他方では社会福祉士国家試験への受験資格を取得する科目開講の制約をうけ、学部や学科・専攻名称にかかわらず、その目的を遂行する教育課程は、画一化して構成され教育展開せざるをえない経緯があった。

臨床福祉学は、医療や看護、教育や心理領域での臨床実習・臨床実験などから連想されるように臨床現場教育を強調した名称である。1987年に制定された社会福祉士資格制度においても、指定科目として学習する時間数の約半数を社会福祉援助技術（別称：ソーシャルワーク）に関連した講義・演習・実習に配分し、臨床教育を重視してきた。平成21年に改正施行の新カリキュラムにおいても、相談援助をめぐる臨床関連教育科目が、その比重の6割強へと増大してきている。

確かに臨床現場をみすえた職業教育として、社会福祉教育は超高齢社会を支える有為な人材養成へと特化する動向は進展してきているが、臨床福祉学とは、このような関連科目の総称をいうわけではない。厳密には、clinical social work（以下 CSW）と呼称しなければならないソーシャルワークとしての固有な支援科学の体系を指すものである。それらの概念や特徴については、後ほど簡単に言及してみたい。

この名称は、もともとアメリカ合衆国で100年余りの歴史をもつソーシャルワークが、1960年代に公民権運動やベトナム戦争を背景に、荒廃した北米社会の現実に対して存在の意義を問われることになり、伝統的に定説化されてきたソーシャルワークを見直し、従来の実践方法を基礎にしたケースワークをはじめとした方法や、医療 SW・精神医学 SW・家族 SW・児童 SW などの領域で、各種の理論に特殊専門化した実践動向への批判から生まれてきた<sup>(8)</sup>。そして、伝統的かつ力動的な理論的枠組みを変えつつ、周辺状況のもつ現実に対応するため新しい役割に着目して定義づけられた呼称である<sup>(9)</sup>。当時のソーシャルワーカーが姿勢や視野を介入 intervention という新しい概念で示してきたように、人や環境に向けて行動するソーシャルワークへとイメージを転換してきた。

しかし、北米の臨床福祉学として CSW 概念の共通理解には課題が多く、志向する理論や臨床実践現場の

特性から、多様性を帯びた理解が併存して進行してきている。その両極端は、direct practice という人に焦点をあてた実践活動と、他方では、ソーシャルワークが、もっと社会・経済的な公平性のもとに人びとにかかわる社会的使命を果たすべきであるという動向で<sup>(10)</sup>、かつてのわが国の論争を彷彿とさせるものである。前者は、やがて private practice や independent practice<sup>(11)</sup>などを振興させることへと連動し、clinical social worker としての資格制度が全米に整備される動きとなった<sup>(12)</sup>。CSW を、医師が行う心理療法とは区別して、心理社会療法としての限定的実践という意味を付与している州もある。

後者は、社会的背景を重視して、社会的諸制度・組織・計画・施策、保健・教育・社会福祉サービスに影響する資源・環境的障壁へのサポート・社会的ネットワーク・人種問題・偏見・差別など生活の場に対して、社会的な説得力のある実践方法でソーシャル・アクションを展開している<sup>(13)</sup>。

そして今日では、前者の利用者としての人間を基点にしたミクロの立場と、生活の枠組みからなるマクロの立場とに二重焦点化された構図で併存している。そして両者は、環境との相互変容関係に多大な関心を寄せながら個人や家族、グループなどが社会生活場面で出会う大きな課題に対応している。例えば HIV や身体的・性的虐待、移民や移住、精神疾患、身体疾患・障害、浪費、家庭内暴力、暴力犯罪、高齢者・青少年問題、就学問題などに焦点を置いた支援活動を強調するようになってきている<sup>(14)</sup>。これらの実践動向や詳細な経緯については、次の機会に稿を改めて考察してみたい。

北米での多重化した CSW 概念の意味するところについて、少し考察しておかねばならない。なぜ、臨床 clinical なのかということでは、ソーシャルワークが、歴史的な発展の経緯から、利用者の問題を病理モデルとしてとらえることから出発し、医療現場と密接にかかわってきた。社会診断や社会治療などとともに想定されることである。しかし、リッチモンドは、この用語を直接用いたわけではないが、後の1940年代には医療機関で活躍するソーシャルワーカーを、特別な意味内容を付与することもなく、clinical social worker と総称していた時代もあった。

## 2 CSW 概念の実相

臨床 clinical の語源は、ギリシャ語の kline から由来した bed であり、それを拡大解釈した bedside という意味である<sup>(15)</sup> ことから、狭義には、病床での患者に対する医療行為の場面を指すことになる。それを広義に解釈して CSW は、ベッドサイドを人びとの日常生活空間からなる場と位置づけて用い、生活の場であらう克服しなければならない課題へのチャレンジが CSW だと理解されている。1978年に NASW によって CSW の定義が示されている。それは、個人や家族、小集団のもつ心理社会的な機能の支援と維持を目的に、……ソーシャルワークの理論と方法を、……専門職業としての実践へ応用したもので、……人と環境という視野と発想は、CSW 実践の中心をなし、CSW は、対人相互関係や個人内の力動性、生活支援やマネジメントの課題に対応する<sup>(16)</sup> と考えるのが、ミクロの立場からの主流をなす理解である。これは定義というもの、厳密には CSW の特性概念の解説である。

これに対して、一方では、生活問題の解決に社会資源の活用を有効にすることが主要機能であり、社会環境という社会的側面への働きかけに隣接専門職業とは異なる歴史的な使命があり、固有性がある<sup>(17)</sup> とするのがマクロの立場である。それは利用者の求めるソーシャルワーカーが所属する施設機関の特性による<sup>(18)</sup> ということ、また、財政的サービスの観点から施策と生活支援をつなぐ対応策の必要性<sup>(19)</sup> や、利用者ニーズに対しソーシャル・サービス提供をめぐり、公共の視点から正義と公正で適切な対処方法の選択と責任性<sup>(20)</sup> などを主張し、実践に対する社会的視点からの参加や協働を強調する積極的な立場である。

これらの論争動向を詳細に紹介しても解決点が浮き彫りにされるわけではない。それは価値やイデオロギーの課題でもあることから二重焦点で目的をとらえる専門職業教育の必要性の指摘<sup>(21)</sup> や、さらに CSW にも多様な理論と方法があり立場に基づく適切なモデルの選択が重要課題である<sup>(22)</sup> との指摘がある。そこには、やはり統合的で折衷的な視野や発想が必要である。その一つが、ミクロの視座に基点を置きながら、環境的な事象に働きかけ、身近な環境を取り込み、新しい環境を利用者とともに再生することを通じ、その人と生活の改善や変容と成長を引き出そうという方法

である。一般的に構想そのものは必ずしも目新しいアイデアとはいえないが、価値概念に基づく仮説や理論と方法から実践活動計画を生活の場に広げようとするものである。複雑かつ多様化する CSW 実践研究動向を、認知統合的理論の独自の展開によって臨床場面で統合化しようとするもので、われわれに示唆深いものを与えてくれる<sup>(23)</sup>。

指摘してきたように、近年北米での CSW は、複雑な社会的背景と問題の特殊性、対応する多様な理論と展開方法モデルの分化、研究方法の精緻化、隣接科学との協働や切磋琢磨、資格制度の定立などから、厳しい社会と利用者による評価にさらされつつ、多様化した理論や実践が、再編を迫られる動向にある。これは教育や研究、実践の質や量をめぐり、背景や蓄積してきた経験や層の厚みは異なるものの、図Ⅳ-1に示してきたわが国のソフト福祉とハード福祉の統合化への展望と似た状況にあるようにもみえる。

わが国は、北米での研究や実践動向に敏感だが、この CSW の現実をどのように受けとめるべきだろうか。しかし、その背景があまりにも異なっている。その一つは、理論や実践の展開方法にチャレンジできる専門家が十分に育っていない現実がある。超高齢社会をみすえた社会福祉現場での人材養成を拙速に推進し、人材の量的確保を焦眉の急にして、国家資格を錦の御旗に専門教育とはほど遠い大量の促成課程で人材を輩出し、過酷な業務を担わせてきた現実があるからである。利用者の期待する実践サービス業務を人員や費用対効果で推進する矛盾は、やがて従事者の社会福祉職場離れを加速することに連動してきている。

専門性の高い人材養成ではなく、専従制の労働力確保を目的に、各種の安易な資格制度を設定し、福祉労働市場への人材の安定的供給がねらいで、走狗を強いている現実の再編が先決である。高度専門職として職責を果たす北米の CSW とは余りにも格差がありすぎる。福祉国家の理想を安易な人材養成計画で進めた付けが、今日の3K業務へと逸脱させ、有為な人材の確保に支障をきたし、さらに社会福祉サービスの劣化へと悪循環している。その改革をめぐって、量から質へと人材養成に高度専門職としての専門社会福祉士制度の制定が模索されてきている<sup>(24)</sup>。ソーシャルワーカー業務の不透明さを、広く人びとに理解してもらうために、医療・高齢者・障害者・児童家庭・学校・司法な

どの分野別に、他方では権利擁護・退院通所・虐待・就労などの場面で、支援業務に特化した専門資格制度を制定しようという構想である。理解し難いソーシャルワーカーの業務を、具体的な領域や場面に对应して解りやすく資格制度にし、社会福祉士を基礎資格に、高度専門職としての資格制度を制定しようというわけである。

確かにソーシャルワークの業務を具体化しようとする意図は、一つの知恵であり評価できるのだが、本来人間の社会生活で生起する課題は、特殊な見えない部分の多い世界での独自の出来事である。その特殊な状況理解とアプローチする方法への共通基礎を明確にする知恵や工夫も必要である。陽のあたる部分は映えても、陰の部分はますます希薄化し、ソーシャルワークの固有性に誤解を招くことになるからである。

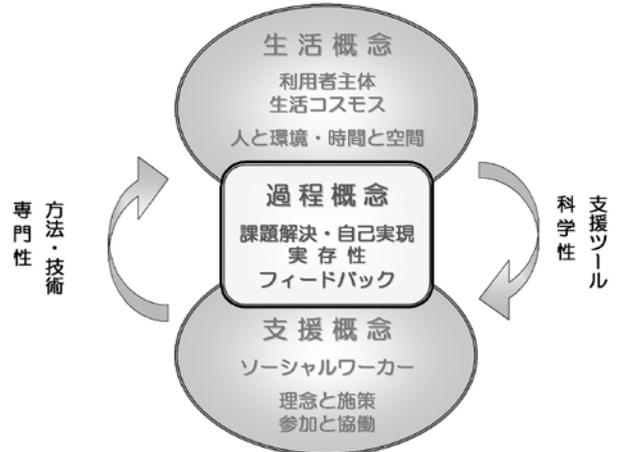
### 3 臨床福祉学の意味と特性

安易な how to ものの対人相談援助への接遇技術や技法と誤解されてきたいわゆる社会福祉援助技術を、支援科学と位置づけられるソーシャルワークとしてとらえ直し、再び整理・分析・体系化しなければならない。それを基盤にすえた臨床福祉学のアイデンティティ確立が課題である。

そのためにソーシャルワークの共通基礎や固有性にこだわり、かねてよりソーシャルワークという実践活動の体系を、3特性に分解して「生活支援過程」であると簡潔に主張してきた。これは臨床福祉学の共通基礎であるが、正確にはジェネラル・ソーシャルワークと呼んでいる。それは、図V-1と表V-1のように、人間が生きる固有な生活世界というコスモスを対象に、利用者と支援者の参加と協働からなる支援関係を積み上げた交流場面を通じて、専門的かつ科学的な方法を用いて課題の解決へと過程を積み上げていくことになる<sup>(25)</sup>。

その利用者とは、個人や家族、共通な課題をもった人びとやグループ、職場や学校、近隣や地域の住民などで、生活の場であう個人や共通の課題をもった人びとである。かれらが日常生活のなかであう人と環境からなる生活コスモスを視野に、そこで生起する課題の解決を目指して利用者の責任ある自助努力と支援者との協働した支援活動の展開過程がソーシャルワ

クである<sup>(26)</sup>。



図V-1 ジェネラル・ソーシャルワークとしての臨床福祉学の特性

特性	観点	目的	視野	技術	固有性
生活		課題解決	コスモス	利用者中心	人間・環境
支援		自己実現	社会的自律性	ホーリズム	支援科学
過程		実存性	拡大深化	参加・協働	エコシステム

表V-1 ソーシャルワーク概念の特性概要

このソーシャルワーク概について、CSWの近年の動向からみてみると、実践の方法やモデルあるいはフィールドは多様化しており、実践の依拠する理論や仮説を反映して独自の方法論で構成されており自由な実践研究成果を通じた切磋琢磨から多元論的な様相を呈している。また北米の伝統を重視した実用的な実践成果の具現化に執心するプラグマティズム的な実践研究、さらに前述の二重焦点の統合化方法を志向する実践研究などに三大別される動向が併存している<sup>(27)</sup> 現況がある。

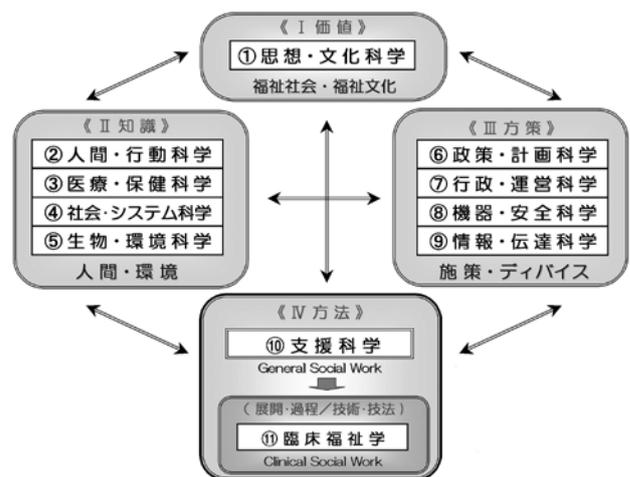
これら多様化する実践理論概念の中でも、多少の異論があるものの基礎概念は、次のような特性によって共通理解されている。それは各種多様な実践理論の背景に、①人間性の尊厳を基礎に復権とノーマライゼーションへの価値観が共有<sup>(28)</sup>され、②ありのままの生活に迫ること<sup>(29)</sup>であり、人びとの生きる状況を③ person-in-situation からなる視野と発想<sup>(30)</sup>でとらえている。また④支援による人の変容・成長から社会の変容・変革を目指<sup>(31)</sup>しており、④システム理論と生態学理論とが発想の原点<sup>(32)</sup>にあり、そして、⑥調査研究と実践とが統合化<sup>(33)</sup>された共通点をもっている。

臨床福祉学の臨床とは、利用者の固有な日常性への寄り添いと支援をいうわけである。したがって、臨床福祉学の特性は、①利用者の生活コスモスへの視野と発想、②自らの課題の解決と自己実現を目標に、③課題に対応した体系的な支援レパトリーを的確に駆使して、④制度としての社会福祉サービスを提供しながら、⑤利用者とソーシャルワーカーとの支援ツールを介した参加と協働からなる専門的かつ科学的支援活動を展開することである。そして、⑥利用者自らのもつ自己統制力や社会的自律性の育成と強化を支援し、他方では、⑦支援サービスの点検や環境調整からのフィードバックによって支援施策やサービスを再編・整備し、⑧実践活動の専門的・科学的な推進から支援局面を深化させ、技術や技法の駆使によって利用者の実存を支援する過程であるとまとめられる。

まさに臨床福祉学とは、生活コスモスを支援する科学であり、その基礎は、ジェネラル・ソーシャルワークそのものからなる生活支援過程ということになる。それは北米のCSW 統合化実践と共通する視野と発想をもっている。このような意味で臨床福祉学は、ジェネラル・ソーシャルワークを基礎に人間の生活コスモスに寄り添う技術や技法を駆使した専門的な方法で、科学的手法を用いながら利用者との実存的コミュニケーションを展開し、学際的支援諸科学のネットワークによる利用者の課題解決と自己実現を目標にした参加と協働からなる支援活動だとまとめられる。これを別名で、clinical social work と呼ぶことができる。

ムとして図示すれば、図VI-1のような構図にまとめられる。これはソーシャルワーク実践の特性を構成要素に構造化した枠組みに沿って、隣接諸臨床福祉学の体系を、コンステレーションにしたものである。価値や思想を根幹に、人間と環境についての知識と、他方では福祉国家としての施策と科学技術の成果の活用を大前提にして、実践方法に特性を見出すところに臨床福祉学としてのアイデンティティがあるといえる。

このシステム図は、厳密には構造図であって隣接の支援諸科学との位置関係について、臨床福祉学を要にして描いたものである。協働関係が醸す機能や役割には触れていないが、臨床福祉学が実践場面で出会い問われるのは、その働きやネットワークがもたらす成果である。これらへの問いかけを意識しながら、本稿を閉じることにしたい。



図VI-1 支援科学の学際的構成と臨床福祉学

## VI おわりに

本小論のねらいは、臨床福祉学への序説であり、考察の目的にもあるように臨床福祉学(クリニカル・ソーシャルワーク)の立脚点と特性を整理することである。臨床福祉学の確立のためには、その理論的枠組みや実践方法さらに課題についての考察を実証的に深めねばならない。次の機会に、それらへの蓄積してきた考察を紹介できるように努めたい。

最後に、まとめに代えて臨床福祉学の学際的位置づけについて触れておきたい。臨床福祉学という利用者のトータルな生活世界に視野を広げることから、その体系をコンステレーションにして学際的構成のシステ

## 注

- (1) 国際ソーシャルワーカー連盟 (IFSW) のソーシャルワークの定義 (2000年)  
<http://www.ifsw.org.jp38000208.html> 2000年
- (2) *Ibid.*
- (3) 太田義弘『ソーシャル・ワーク実践とエコシステム』誠信書房 1992年 第4章「実践へのシステム思考」参照
- (4) 太田義弘・秋山薊二編著『ジェネラル・ソーシャルワーク』光生館 1999年 第1章「ジェネラル・ソーシャルワークの基礎概念」参照
- (5) 太田義弘「ジェネラル・ソーシャルワークの意義と課題」

- 『ソーシャルワーク研究』 Vol. 24. No. 24, 相川書房 1998 年 4-10 頁
- (6) 前掲書 (3) 第 5 章「実践へのエコシステムの視座」参照
- (7) 太田義弘・中村佐織・石倉宏和共編著『ソーシャルワークと生活支援方法のトレーニング/利用者参加へのコンピュータ支援』中央法規出版 2005 年  
太田義弘編著『ソーシャルワーク実践と支援科学』相川書房 2009 年
- (8) Darlene Grant, "Clinical Social Work," in Terry Mizrahi and Larry E. Davis, eds., *Encyclopedia of Social Work*, Vol.1, NASW Press, 2008, p. 319.
- (9) Carol R. Swenson, "Clinical Social Work," in Richard L. Edwards and others, eds., 19th *Encyclopedia of Social Work*, Vol.1, NASW Press, 1995, p. 502.
- (10) *Ibid.*, p. 505.
- (11) Jessica Rosenberg, *Working in Social Work / The Real World Guide to Practice Settings*, Routledge, 2009, pp. 174-175.
- (12) Laura W. Groshong, *Clinical Social Work Practice and Regulation / An Overview*, CSWA, 2009, pp. 2-3.
- (13) Helen Northen, *Clinical Social Work / Knowledge and Skill*, Columbia University Press, 1995, p. 10.
- (14) Darlene Grant, *op. cit.*, p. 319.
- (15) Carol R. Swenson, *op. cit.*, p. 503.
- (16) Rachele A. Dorfman ed., *Paradigms of Clinical Social Work*, Brunner / Mazel, INC., 1988, pp. 17-18.
- (17) Harry Specht, "Policy Issues in Clinical Practice," in Aaron Rosenblatt and Diana Waldfogel, eds., *Handbook of Clinical Social Work*, Jossey-Bass, 1983, pp. 721-722.
- (18) Henry Mill and Coonnie Philipp, "The Alternative Service Agency," in Rachele A. Dorfman ed., *op. cit.*, p. 780.
- (19) Paul Terrell, "Financing Social Services," in Aaron Rosenblatt and Diana Waldfogel, eds., *op. cit.*, p. 801.
- (20) Shirley Jenkins, "Social Service Priorities and Resource Allocation," in Aaron Rosenblatt and Diana Waldfogel, eds., *op. cit.*, pp. 821-823.
- (21) Cary A. Lloyd, "Values and Ideological Dilemmas in Professional Education," in Aaron Rosenblatt and Diana Waldfogel, eds., *op. cit.*, p. 752.
- (22) Carol H. Meyer, "Selecting Appropriate Practice Models," in Aaron Rosenblatt and Diana Waldfogel, eds., *op. cit.*, pp. 734-737.
- (23) Sharon B. Berlin, *Clinical Social Work Practice / A Cognitive-Integrative Perspective*, Oxford University, 2002.
- (24) 日本学術会議 社会学委員会 社会福祉学分科会『提言 近未来の社会福祉教育のあり方について-ソーシャルワーク専門職資格の再編成に向けて-』平成 20 年発刊
- (25) 前出文献 (4) を参照
- (26) 前出文献 (7) を参照
- (27) William Borden, "Taking Multiplicity Seriously: Pluralism, Pragmatism, and Integrative Perspectives in Clinical Social Work," in William Borden ed., *Reshaping Theory Contemporary Social Work / Toward a Critical Pluralism in Clinical Practice*, Columbia University Press, 2010, pp. 3-5.
- (28) Laura W. Groshong, *op. cit.*, p. 2.
- (29) Carol R. Swenson, *op. cit.*, p. 503.
- (30) Eda G. Goldstein, Dennis Miehl, and Shoshana Ringle, *Advanced Clinical Social Work Practice / Relational Principles and Techniques*, Columbia University Press, 2009, pp. 1-10.
- (31) Mary Nomme Russell, *Clinical Social Work / Research and Practice*, Sage Publications, 1990, p. 11.
- (32) Darlene Grant, *op. cit.*, p. 319.
- (33) Mary Nomme Russell, *op. cit.*, 13-16.